



樂音

佛歴二五六五 西歴二〇二二
令和四年六月号

発行 樂音寺 住職 内藤睦雄

電話 090-3140-3931 (携帯)

0553-47-3475 (お寺)

FAX 0553-47-3495 (只今使用不可)

寺庭 090-8643-0852 (藤井牧子)

六・七月の樂音寺住職

六月七日 無相教会代表委員会

二十六日(日) 山梨交響楽団演奏会

チャイコフスキー交響曲第五番ほか

於県民文化ホール 感染対策万全 遠慮なくどうぞ

十二・二十六日 坐禅会 朝六時三十分

七月十三〜十五日 盂蘭盆会

東京方面及び石和の一部の

先祖供養にお伺いいたします

ご都合を連絡ください

十・二十四日 坐禅会 朝六時三十分

表紙は岐阜県多治見の虎渓山永保寺、南禅寺派の修行道場です。梅雨入り前の五月に行ってきた。庭園は甲斐国恵林寺の庭も作庭された夢窓国師の作、山の起伏と豊かな水辺のお寺、春に行っても夏にも秋も、きつと冬も好い所。正面奥は寺の大庫裏、太鼓橋の左は観音堂で国指定の文化財です。檜皮葺の屋根の形が素晴らしい。

今月の掲示板

明らみて

一方暗し 梅雨の空

明け方、目が覚めたら空が明るくて、もうこんなに明るいんだと、冬の長い夜のイメージからなかなか抜け切れず、遅刻したような気分。方や西の空に目をやると梅雨の暗雲があつて、今日も雨かな晴れかな暑いかな、とよぎります。梅雨時の、いつ急変してもおかしくない不安定さを詠んだ虚子の句。

物事がうまくいくことに全く疑いがなかったのに、つい見方を変えてみたら、まだまだ暗い部分の存在に、落ち着けない気分も表していますよね。

いつ咲いたのか気が付かない時があるくらい、あつという間にこんなに豪華に、そして再びあつという間に咲き落ちてしまう「ひめウツギ」

行雲流水

空行く雲や川を流れる水のように執着することなく、ものに応じ



事に従って行動すること。言ってみれば成り行きに任せることなのですが、人生、欲と希望と努力抜きには成功はありえないとする向きは多いはず。何をもって成功というのかはともかく、さてどんな気持ちで「行雲流水」をとらえましょうか。

私は思うに、お寺さんって本当にとことん相手の

気持ちになれる人だと思っています。そこで大きく目を見開いて、行く雲や流れる川の水を見てみると、人の立場になってみよう、とか、必要以上の欲をかかず、あなたの必要なものはすでに持っているよ、というささやきに耳を傾けることだと考えます。

行雲流水の省略形が禅の修行者の異名である「雲水」です。僧侶は一つ処に留まらず、というより一つの見方だけでなく、様々な立ち位置を極め自由に遊んで、物の真実を求めて歩く姿でありましょう。

臨濟寺専門道場へ出立

臨濟寺からほど近い「きくや」という老舗の旅館に投宿。翌早朝いよいよ寺に向かうのですがその日、案の定三月の、それも常夏の静岡は大雪でした。後で知ったところでは、この地では記録的大雪だったそう。目出度い

ことです。網代傘をかぶり足袋、脚絆はつけてもスカートのような着物の下はパンツ一丁。寒い冷たいの言葉も見つかからないほど。臨濟寺まで、今思えば大した距離ではないのにまるで宙を歩いているよう。威圧的な門をくぐり広くて長い石段を登りきると体育館のような本堂。その右には玄関らしきところが見え、重々しい障子戸を開けて言われた通り掛搭願書を置いて上がり框に頭を伏せ、大声で『たのみましようー』返事がない。留守かな。いや気配はあるし、もっと大きな声でと思った途端、冷たくもドスの効いた声で『どーれー』高圧的に必要以上の足音をさせて誰かやってくる。退路を断たれ、もうこれ以外に道無し of 思いで入門を願った、三十四歳の初めの声、始めの一步でした。

今この本を

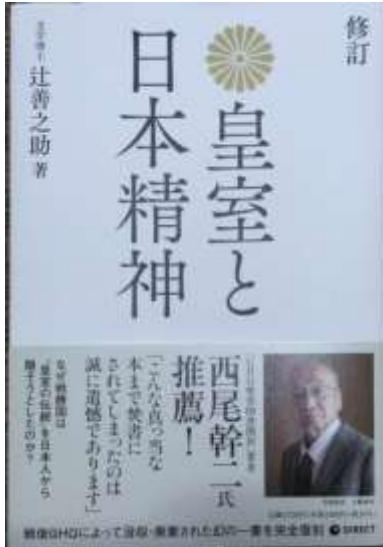
『皇室と日本精神』

大日本出版

著者 辻善之助(つじ ぜんのすけ)

歴史学者。明治十年生まれ。帝国大学文科大学国史科卒業 帝国大学史料編纂所長、東京帝国大学教授 今日の史料編纂所の基礎を築くとともに、文化史・仏教史に大きな業績を残す。熱心な真宗信者。

私の記憶が正しいとするなら、令和天皇が即位のタ イミングでご挨拶をされた内容に、私は感激した。



皇室に生まれたからには、人々の心が解らなければいけない。きれいな服を着ていても、その布を織った人の顔が解らなければ、美味しいお食事を頂いて

もそのお米を作った農家の人の顔が解らなければいけない、そういう立場であることを肝に銘じて：という趣旨であったと思う。そのお話の出典が、妙心寺の開基であり第九十五代花園天皇、のちの花園法皇が執筆された『誠太子書』である。本書を手に入れたのは、その『誠太子書』の全文と解説があったから、だけではなく、歴代の多くの天皇が同様に「天皇として」のみならず「人として」数多く説いた文章も含まれる故。華美や贅沢から一線を画した精神性の高さ、誰に対しても平等に接遇することで、皇室は日本国民の幅広い尊敬と支持を集めている。しかしながらなぜかそれ故に、という歴史も非常に残念ながら存在しており、例えばGHQによって、日本精神論をテーマにしたおびただしい数の書籍がいわゆる焚書にされた事実、その一冊でもある。大変失礼ながらまだ一部しか目を通していない時点での本書の紹介だが、復刻版の本書の重要性を、時間をかけて読み進め、眼が開かれたら嬉しい。